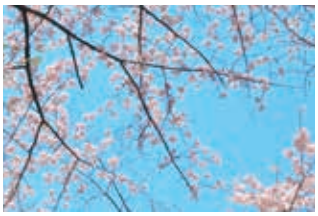
2018（平成30）年５月30日　　第214号

聖心キャンパス

第214号の主な記事

・平成30年度入学式関連記事
・新任教員紹介
・平成29年度卒業式関連記事
・進路状況及び就職活動について
・聖心女子大学マグダレナ・ソフィア・バラ記念学長賞
・聖心女子大学学長賞
・学部名称変更　他

平成30年度　入学式



聖心女子大学
平成30年度入学式

4月3日（火）於 マリアンホール

式辞

聖心女子大学 学長
岡崎 淑子

新一年生、編入学生の皆様、聖心女子大学ご入学おめでとうございます。保護者の皆様にも心よりお祝い申しあげます。留学生の方たちも、聖心女子大学での学生生活のスタート、おめでとうございます。来賓の皆様におかれましては、ご多忙のなか新入生を祝福してご列席いただき、心より感謝申し上げます。

今日から、皆様はこの大学で思う存分勉強し、活動し、色々な人と出会い、関わりあって、卒業の時までに今のご自分を何倍にも成長させて下さい。皆様の中には、大学生になったらこれをしたい、こうなりたいと、希望や期待に胸を膨らませている方たちが多いことでしょう。一方、新しいこと、難しいことに直面して不安で一杯ということもあるに違いありません。

大学の教員や職員は、皆様一人ひとりの今と将来を考えて、各自の可能性を最大限に伸ばし、社会で活躍できる人間へと成長していけるように精一杯、指導、支援していきたいと決意しています。

私が皆様にまずお話ししたいことは、今日からこの大学で一緒に学生生活を送ることになる仲間の一人ひとりを知って、友人を作る努力をしましょうということです。自分とは違った個性を持った友人とも出会うきっかけを積極的にみつけていきましょう。

現代社会において、多様な人々と出会い、理解し、尊重して共に生きていくということは重要な課題であり、大学生活の最も身近なところでそれを身につけることは必須です。聖心女子大学の教育理念は、一人ひとりをかけがえのない存在として尊重する人間観をもとに、大学での勉強や経験の成果として、社会との関わりを深め、一人ひとりが尊重される社会を共に作っていく人を育成することです。

グローバル化が加速する現代、異なるバックグラウンドをもった人々と接する機会が増大しています。2年先に迫る東京オリンピック・パラリンピックにおいても世界中から様々な人々が訪れます。自分が出会う人たちとどのように関わるか、考え方、感じ方、行動様式の違い等をどのように受け止めるか、ともに行動できるか等が問われます。外国人に限らず、自分とは異なる年齢層や、社会的経済的環境、価値観、生活習慣を異にする人、何らかの障害の有無など、多様性を理解し、尊重し、異なる特性をしなやかに受け止めることのできる女性になること、グローバルなマインド、姿勢をもった人になる努力をしていきましょう。少人数の大学だからこそ、異なる個性を持った人とも身近に接する機会が豊富にあるといえます。

さて、聖心女子大学の創立は1948年ですから、今年2018年入学の皆さんは創立から70年目の入学者ということになります。本学の歴史は70年ですが、最初の聖心の学校は1801年にフランスのアミアンでマグダレナ・ソフィア・バラという聖心会修道女によって創立されました。当時のフランスは革命直後であり、社会体制の大変化、価値観の転換など、社会は混乱を極めていました。そのような時代に、女性が幅広い学問分野の知識を深く学び、しっかりした知性や判断力をもって、自分が生きる社会の現実を洞察し、行動的に関わっていく女性を育成することが創立者の教育の理想でした。本学はこの教育理念を継承しています。

初代学長はアメリカ人のマザー・ブリットでした。第二次世界大戦終結直後の時代に開学し、アメリカのリベラルアーツ教育をモデルとして、学生たちに幅広く、かつ深い知識を学ばせ、その時代の社会と積極的に関わるリーダーシップをもった女性を育成する教育の基礎が築かれました。この教育の成果は、社会の見えるところ、見えないところで活躍

している卒業生が証ししています。今日入学された皆様にも大きな期待がかけられています。

本学の第一期生の中に緒方貞子さんがおられました。日本人として、また女性として初の国連難民高等弁務官に就任され、１９９１年から10年間、従来の国家間戦争とは異なる地域紛争や内戦が頻発する中での深刻な難民問題の解決に大きく貢献されました。

緒方さんは、学生時代に、初代学長が重視された学生自治会活動に携わって学んだことが、国連難民高等弁務官事務局長の任務を遂行する時に指針となったと述べておられます。

マザー・ブリットは、学生たちが積極的にアイディアを出し合い、皆で相談しながら物事を決めていくこと、いつも他の人のことを考えて行動すること、そして社会的な必要に応えて行動を起こしていくことを強調されました。緒方さんが、現代史上例をみない膨大な難民の発生に対して、現地に足を運び、難民たちの声を直接聴き、人道主義を最優先して、新しい支援の枠組みを決断し、行動していかれたところには、学生時代に学ばれた「一人ひとりの人間を尊重して決断し、行動する」という姿勢が貫かれていたと言えます。

緒方貞子さんは皆様の70年前の大先輩ですが、もう少し身近な、今から２年前の卒業生のお話をしましょう。

アートクラブ部員の学生たちが中心となって、『9か国語で覚える！ 医学図典 Medical Picture Dictionary in 9 Languages』という本を制作・出版しました。本学には医学部も美術学部もないのに、どうして医学図典などを制作できたのでしょうか。これは、本学のアートクラブの学生たちが、東京女子医科大学や東京外国語大学の教員方や学生さんたち、また本学の教職員の協力を得て、こつこつと作り上げました。約６００語の医学系単語を、英語、スペイン語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、アラビア語、コリア語、中国語、日本語に翻訳したユニークな医学図典です。単語一つひとつにイラストがついて子どもにも分かり易く、各単語・各国語にはカタカナがつけてあって、発音も声に出せるようになっています。病院や保育園、ホテルや航空機内などにも置かれて好評であり、２０２０年のオリンピック・パラリンピックで訪れる外国人旅行者や外国人対応の医療機関、ボランティア団体の方々にも役立つだろうと言われています。学生たちが丹念に一つひとつ描いたイラストはユーモラスで温かい感じがします。本学のホームページでも見ることができますし、1年次センターで手にとって見ることができますので、ぜひご覧下さい。

緒方さんや、本を出版した学生たちのお話をしたのは、本学が教育方針としている、大学での学びや経験を通して、社会の現実を洞察し、行動的、積極的に関わること、その根底に一人ひとりの人間を大切にする精神が貫かれていることを、聖心女子大学の学生となる皆様と一緒に考えておきたかったからです。

本学４号館にある「グローバル共生研究所」ではグローバル化や共生に関わる現代社会の現実について、授業やワークショップ、公開シンポジウム、公開講演会などを各種企画しており、どの学年の学生も自由に参加でき、国際協力関係のＮＧＯなどといっしょに活動することもできます。これらにも積極的に参加して問題意識を深めていきましょう。

これからの大学生活では、多様な友人を作っていくこと、違いを受け止める努力をすること、そして社会の現実に関心を深め、小さなことからでも本気でやってみることにチャンレンジして下さい。

楽しく、本当に有意義な学生生活を送ることができるように、神様の豊かな祝福をお祈りいたします。

聖心女子大学
平成30年度入学式

祝辞

聖心女子大学協力会会長　濱口 敏行

皆さんご入学誠におめでとうございます。これまでの皆さんのご研鑽の甲斐あって、本日この歴史と伝統ある聖心女子大学にご入学になられました事を心からお祝い申し上げます。またご臨席のご両親様およびご家族の皆様にも心よりお慶び申し上げます。

協力会は聖心女子大学における学生生活が円滑にかつ充実したものとなるよう支援する保護者を中心とする後援会組織です。協力会を代表して、一言ご祝辞を申し上げます。

学校法人聖心女子学院の教育理念には、「一人ひとりが神の愛を受けたかけがえのない存在である事を知り、世界の一員としての連帯感と使命感を持って、より良い社会を築く事に貢献する賢明な女性の育成をめざす」と謳われております。

これはいまから約200年前のフランスで聖心会を創立した聖マグナダレナ・ソフィア・バラの教育の理念であり、その根底にはキリスト教のヒューマニズムがあります。本学では、皆さんは集団の中の一人ではなく、かけがえのない大切な存在として、シスターや先生方が接してくださいます。

岡崎学長様は、「自分の隣の人、社会の人々が必要としていることを敏感に気づき、頭を使い、手足を使って、よい状態をつくりだそうとする、そんなエネルギー」を「聖心スピリット」と呼んでおられます。

皆さんはこの4年間をこのすばらしい環境の下で、この「聖心スピリット」を学び、真の人間力、リーダーシップを育んで下さい。

次に皆さんと共に、「今の時代をどう認識したらよいのか」について考えてみたいと思います。現在私共は社会の急激な変化の中におります。人はどこにいて、どこへ行くのか、この時代の変化をどう受け止めたらよいのか、について答えを見つけにくい時代になったと認識しております。

これはまさに聖心会の創設者であるマグダレナ・ソフィア・バラの直面されたあのフランス革命の時代の混乱に重なっているように思います。

19世紀人類は、ソフィア・バラの体験されたフランス革命、それを誘発した啓蒙主義思想や産業資本主義の発展を経て、帝国主義の時代へと突入して行きました。そして20世紀の戦争の時代へ入ってゆきます。

皆さんのご両親やご家族の経験された20世紀は、2つの大きな戦争、そして一方科学技術の急激な発展の中で、人々は、過去の時代を反省し、自由と平等を基本とした民主主義とその価値に目覚めた時代でもありました。

そして皆さんの体験されてきた21世紀の時代となります。世界は平和と繁栄をめざし、グローバル化と経済制度としての市場主義が、急速な勢いで世界中に伝播し、人々の生活水準を押し上げました。

いま21世紀に入り、約18年が過ぎましたが、これは丁度皆さんの年齢に近いと思いますが、世界は大きくしかも早く変化し、時代は私共が想像もしていなかった方向へと進んでいる感じがあります。

グローバリゼーションの破たん、極端な民族主義の台頭、世界中で起こっている貧富の差の拡大そして独裁主義国家の出現等々、私共が今まで信じていた民主主義は大変大きな危機に陥っております。

17世紀の哲学者トマス・ホッブスは「人類の自然状態は闘争状態にある」という「万人の万人に対する闘争」の時代へと逆戻りしてしまったのでしょうか。

時代は文明から野蛮へ、寛容からエゴイズムへ、一言でいうと「Disruption（分断）」の世界と言われる時代に直面しています。さらにここにAI、IOT、ロボティックス等の100年に一度といわれる技術革新が急速に進行し、人間をデータとアルゴリズムのみで理解しようとする知識人すら出てきております。まさに不確かな、予測不能の答えのない時代となっています。

長々と時代の変化を述べましたが、だからこそいま皆さんが聖心女子大学の門をくぐられた事に意味があるという事を申し上げたかったからであります。これからの4年間はみなさんの人生にとり、大変重要な時期になると思います。もちろんこの素晴らしい環境の中で、多いに楽しい学生生活をエンジョイしていただきたいですが、私がいま申し上げたことを念頭に置いて、勉学と思索にも励んでいただきたいと思います。

このような混迷の時代に人生の先輩として、3つの事をお話ししたいと思います。ひとつは、この4年間で、しっかりした価値観、人生観をご自分の中に創り上げる事、もう一つは、この急激な世界の変化について、どう対応したらよいのかについて、この4年間の学びの中で、考えていただきたい事、そして最後に、聖心女子大学創立以来堅持してこられたリベラル・アーツこそこれらの難問に回答する方向を示してくれるという事であります。

先ず、第一点目はこの4年間でしっかりした価値観・世界観を育み、よき人間力を形成していただきたいという事です。本学は創立者であり、フランスやヨーロッパ各地で活動された聖マグダレナ・ソフィア・バラや、当時の新天地アメリカで聖心会の教育を始められた聖フィリピーン・デュシェーンなど、すばらしい先人のシスター方により、キリスト教ヒューマニズムに基づく真の人間性、社会性の追求を基本とする教育を、200年間一貫して行われてこられました。皆さんはこれらの考え方を学ばれると共に、このベースの上に、さまざまな宗教、哲学、文学、歴史等を学ばれ、ご自分が納得されるしっかりした価値観を育んでいただきたいと思います。

そして2点目はこの静かなキャンパスの中で、今の世の中の変化についてよく学び、ゆっくり考えてください。

今まで私どもが正しいと思って信じてきたものが次から次へと覆されてしまう世界の動きにどう対応していったらよいのか、様々な学びを通して、英知を育んでいただきたいと思います。

最後にこれを可能にするのは、リベラル・アーツの教育であります。人類の歴史、先人が積み上げてきた哲学、思想、価値などを含め、人として身につけておくべき深い教養であります。これからの4年間皆さんはできるだけ古典に触れ、文明の歴史や哲学を学問の基本として、学んでいただきたいと思います。そして先生方や友人達と対話してください。これから皆さんの歩まれてゆく次の時代は、決して平穏な時代ではないように思います。私共は7年前にあの東北大震災を経験しましたが、自然災害、政治・経済・社会の変動等、予測されない危機に直面しております。このような厳しい時代の中で、この聖心女子大学の教えるソフィア・バラやフィリピーン・デュシェーンの歩まれたような崇高な精神と愛を持って、皆さんが神様から与えられた能力を最大限社会のために活用されるべく、この4年間を有意義に過ごされる事を切望し、私からのお祝いの言葉とさせていただきます。

本日は、ご入学まことにおめでとうございます。

新任教員紹介

人間関係学科
木戸 功 教授

人間関係学科に着任いたしました。社会学関連の科目を担当いたします。私は家族社会学を専門とする立場から現代社会をポスト近代家族的状況にあるものととらえています。近代家族とは父・母・子を構成員とし、夫婦が相補的な役割を担い合うことで営まれる生活の基礎単位であり、親密性を提供する人間関係として社会的に期待される家族のあり方です。ポスト近代家族的状況とは、そのような家族を期待する社会規範が維持されつつも、その実現可能性が低下した状況としてとらえられます。こうした規範と現実のギャップによってさまざまな家族問題が生じています。どうしたらこうした問題を解決することができるのか、みなさんと一緒に学びながら考えていきたいと思っています。

国際交流学科
鈴木 弘貴 教授

私は、大学を出た後、通信社の経済部記者となりましたが、そこで実体験した「ニュースに国境はない」という現象に興味を持ちました。30歳になるのを機に記者を辞して米英に留学（遊学？）し、日本の大学の博士課程を経て学究の道に入りました。

研究のスタートはEuroNewsという、汎ヨーロッパニュース専門テレビ局を、欧州統合との関係の中で考えていくものでしたが、その後、視野を広げてCNN InternationalやBBC World News、Al Jazeera Englishといった「グローバルジャーナリズム」を調査してきました。

本学では、自分の研究の仕上げとして、「アジア共通のニュース」の研究と実践に取り組みたいと思っております。これから、ご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

教育学科
加藤 洋子
准教授

社会福祉学を専門としており、教育学科で「社会福祉」「児童家庭福祉」「保育実習指導」等の授業を担当します。

社会福祉学の中で、特に子どもの福祉に関心があり、子どもの虐待防止を中心に児童相談所、家族への支援、子どもの貧困、里親に関する研究をしています。子どもと家族の福祉、社会的養育には何が求められているのか、そのあり方について探究し、子どもの人権擁護に関する研究を社会的活動に繋げるために努力しています。その研究成果を常に授業に反映できるように取り組みたいと考えています。

将来、教員、幼児教育・保育の道に進む人、専門的職業に就く人、進路は様々だと思いますが未来を担う子どもたちの人権擁護や家族支援について、学生の皆さんとともに考え学ぶ楽しさを共有したいと思います。

教育学科
髙嶋 景子
准教授

私は、乳幼児期の保育や教育、子育て支援という研究領域に関心を持ち、これまで幼稚園教諭と保育士を養成する大学において教育研究に携わりながら、保育の場におけるフィールドワークを通して、乳幼児期の子どもたちが、様々な人やモノや出来事との出会いを通して、自らの興味の対象を広げ、それらとの豊かな対話を通して主体的に育ち、学んでいく過程や、それを支える実践の在りようを探究してきました。さらに、そうした取り組みから、子どもたちの傍らに在る保育者や保護者の育ちの過程にも興味が広がってきています。

このような保育や子育ての営みを巡る様々な問いを探っていく面白さと奥深さを学生のみなさんと共有していきたいと思っています。

史学科
五味 知子
専任講師

史学科で東アジア史を担当します。専門は主に16世紀末～20世紀初頭（明末～清末）の中国史で、特にジェンダーや家族に着目しながら、法規範や社会規範を分析しています。日常生活や家族といった身近な問題から、徐々に政治や経済、社会構造といった大きな問題へと視点を広げつつ歴史を見るミクロヒストリー的手法が好きです。歴史学は人間の営みに関するあらゆる事象を研究対象とする幅の広い学問です。日常で感じる「なぜなのだろう」という素朴な疑問から出発し、文献を読みながら「かつてはどうだったのか」を探ることで、異なる文化・社会背景を持つ地域に対する理解力を養うことができます。学生の皆さまと一緒に、歴史学を学ぶ楽しさを分かち合っていきたいと思います。

史学科
酒井 一輔
専任講師

史学科で日本近世史を担当します。江戸時代～幕末維新期の経済史を専門にしています。

最近、共同で取り組んでいるのが、江戸時代の日本でトップ５に入る程の商人・加島屋広岡家の研究です。この加島屋広岡家、実は、３年程前の朝ドラ「あさが来た」で、主人公が嫁いで活躍したお家のモデルなのです（ドラマでは加野屋と白岡家でしたが）。ドラマになり世間の認知度が高まったことで、本物の加島屋広岡家の古文書約6000点が新発見されるという、ちょっとした奇跡が起きました。

テレビやドラマをきっかけに日本史に興味を持ったみなさんにも、同じような奇跡が待っているかもしれません。身近な興味・関心から新たな発見・解明が生まれる体験を、今後は学生のみなさんとも共有していけたらと願っています。

グローバル共生研究所
林 真樹子
助教

この度、母校での大学新拠点となるグローバル共生研究所において、国際交流・協力への貢献に資する教育及び研究活動に携わることができることに感謝しております。私は、教育社会学に基づく発展途上国の国際教育開発論を専門分野として研究しております。その中でも特に社会から排除されやすい疎外要因とも呼ばれる障がい、少数民族･少数言語、貧困、女児･女性、居住地の地理的条件等を複雑かつ重層的に抱える社会的弱者に焦点を当てたインクルーシブ教育を研究しております。本研究所が提供する実践的な教育環境を最大限に活用し、グローバルな社会課題に共通する「多様性と共存」に対する良質な問いを通じて、それらの課題への理解を学生の皆さんと深めたいと思います。さらに目指すところは、時代のニーズに必要な本質を探し出すアンテナと前進する気概を持つことができる人材育成ができれば幸いです。

平成29年度 聖心女子大学 第68回卒業式

祝辞

カトリック東京大司教　菊地 功

皆さん、ご卒業、本当におめでとうございます。またこの晴れの日をともにお祝いするご家族の皆様にも、心からお喜びを申し上げます。これまでのこの大学での出会いや生活の思い出を胸に、本日旅立って行かれる皆さんの前には、様々な可能性と挑戦に満ちた、ある意味厳しい現実が待っています。この社会の中で、さらに成長を続ける皆さんには、キリスト教の精神を土台とするこの大学での出会いや学びを心に深く刻み込み、それを忘れずに歩んでくださることを期待しております。

東日本大震災が発生してから、明日でちょうど7年になります。人生の中には様々な出来事がありますが、その歩みの中で、その日どこで何をしていたかをはっきりと記憶している瞬間というのはそれほど多くはありません。東日本大震災という出来事は、それほど、私たち多くの人生にとって、重要な意味を持つ衝撃的な出来事でありました。いや、過去形で語ることは許されません。7年が経過した今でも、その爪痕は明確に残され、多くの方が復興のために日々努力を続けられています。普通の生活を取り戻すことが、これほど大変な作業だとは、7年前には誰も想像していなかったのではないでしょうか。

東北は私の故郷です。私は岩手県の宮古市で生まれ、盛岡で小学生時代を過ごしました。その意味で、今回の大震災は、私にとって懐かしい三陸の沿岸部の風景を一変させ、故郷の友人たちからこれまでの生活を奪い取った災害として、個人的にも大きな意味を持っております。

私はカトリック教会の人道支援団体であるカリタスアジアとカリタスジャパンの責任者を務めております。カリタスはバチカンに本部を置く1951年設立の「国際カリタス」を中心に、世界各地160以上の地域カリタスからなる連盟組織です。世界各地の紛争や災害の現場で援助活動を続けており、東北の被災地でも、発生直後の3月16日に始まり、この7年間、様々な活動を続けて参りました。

震災から一月経った2011年4月にやっと時間がとれて、宮古へ出かけることができました。幼なじみが宮古市の田老地区に連れて行ってくれました。友人の家族は幸い無事だったものの、田老の防潮堤の内側にあった彼女たちの家は津波で流されていました。子どもの頃から見知ったそびえ立つ城壁のような防潮堤は見事に破壊され、その一部は粉々になり流されて、港の中に散らばっておりました。

無残な姿をさらしていた田老の港を見下ろす小高い丘に立ってみると、港とは反対側の海岸沿いに立つ「三王岩」という高さ50メートルほどの岩が見えます。陸地からちょっと離れたところに海に対峙する壁のようにそびえ立っております。津波の直後、城壁のような威容を誇っていたコンクリートの防潮堤が粉々に破壊された様を見て、三王岩もまた、ひとたまりもなかっただろうと地元の人は確信したそうです。しかし数日後にこの丘に登り、おそるおそる反対側をのぞいてみると、三王岩は何事もなかったかのように、そこにそびえ立っていた。

津波に耐えた三王岩とひとたまりもなかった防潮堤。人間の技術の粋を結集したその城壁の無残な姿を見た時、人間の技術やその基礎となる人間の知識が万能ではないことを、あらためて考えさせられました。

この出来事だけに留まらず、今に至るまで明確な道筋の見えない福島の原子力発電所の事故処理問題を含め、この大震災は私たちに、現代社会の人間がどれほど自己過信に陥り、大自然の中でわがままに生きているのかを明確にしてくれました。さらにいえば、大自然には、私たち人間の力をはるかに超えた何者かの力が働いていること、そしてそういう超越的な存在を、私たちが真剣に考えなくなってしまっていることに、注意を向けさせる出来事でありました。キリスト教的にいうならば、神の存在をあらためて認識し、その前で人間がいかに謙遜に生きるべきなのかを、私たちに生きる道を教えてくれる出来事でもありました。

残念ながら時間の経過は、そういった教訓を忘却の彼方へ追いやります。私たちは以前と同じように生きております。それは、今の自分の人生を守り、より楽しくより安楽に生きる方策を優先し、それがために他人の苦しみにはまるで無関心でいるような生き方です。教皇フランシスコはそういう現代人の生き方を、「虹色の夢を与えてくれる見栄えはよいがむなしいシャボン玉の中に閉じこもり、はかない夢を見ながら他者への関心を抱かなくなっている」と指摘されました。

カリタスの援助事業の評価視察で、アフリカの難民キャンプや、アジアの災害被災地を訪問したとき、何度も耳にしたのは、「私たちは、世界から忘れられてしまった」という叫びでした。それは東北でも同じです。人が生きるためには衣食住も必要ですが、将来への希望も必要です。そして希望は、人との交わりからのみ生まれてきます。

聖書のはじめに創世記があります。神がいかに世界を作られたのかを記した物語です。この聖書の物語には、人間は一体何のために生きているのかを考えさせる、神からの語りかけがちりばめられています。その一節に、神が最初の人間アダムを創造されたあと、こう言われたとあります。

「人が一人でいるのは良くない。彼に合う助けるものを創ろう。」

いうまでもなく人間は、一人では生きていくことが出来ません。単に自分の周りには誰か他の人間も生きているという物理的な意味合いだけではありません。神が自分以外の人を創造された理由は、「彼に合う助けるもの」としてであった。だからこそ他者の存在を無視することは出来ない。そういう意味において、一人では生きていけないのです。考えてみれば、この地球上に存在するすべての人は、神によって「自分に合う助けるもの」として存在の意義を与えられている。そうならば、結局は自分自身も他の人に対する「助けるもの」としていのちを与えられたのだと気がつかさせられます。

互いに助け合うよう運命づけられているのです。ですから神を信じる私たちは、人類はひとつの共同体だというのです。それは単に、時間と空間を共有している偶然から発生してきた「運命共同体」という意味ではありません。互いに助け合うようにと、一つに集められたのです。ですからお互いを大切にすること、優しくすること、助け合うこと、愛しあうことは、それぞれの個人的な優しい性格に頼って成立しているのではありません。それは、神から与えられたいのちの本質的な存在の意味として、そうせざるを得ないのです。極端な言い方をすれば、そうしなければ人間ではないのです。

今日この大学を卒業され、これから社会の現実の中で人生の歩みを進めるとき、どうぞ、キリスト教の説く人間のあり方の本質を心の隅にとどめておいてください。神の存在などフィクションの世界に閉じ込め、人間中心がひいては自己中心に陥っている現代社会で私たちは歩みをともにしています。そんな中にあって、むなしいシャボン玉を打ち破って一歩外へと歩みだし、互いに助けるものとして美しく生きて参りましょう。希望を生み出す存在となりましょう。

神様の豊かな祝福が皆様と皆様のご家族にあるように祈りながら、わたしのお祝いの言葉といたします。

第68回 卒業式
第13回 博士学位記授与式
第65回 修士学位記授与式

平成30年３月10日（土）

平成30年３月10日午前10時30分より第13回博士学位記授与式及び第65回修士学位記授与式が行われ、修了生代表として服部紀子さんが謝辞を述べました。

午後１時からの卒業式では、岡崎学長から卒業生一人ひとりに学位記が手渡され、卒業生代表として筒井友里恵さんが謝辞を述べました。

式典の後は、キャップ＆ガウンを纏った卒業生が恩師や友人たちと記念写真を撮る姿が学内のあちこちで見受けられました。

卒業生代表　筒井友里恵さん

修了生代表　服部紀子さん

平成29年度学位記授与者及び卒業生の状況は次のとおりです。

大学院博士後期

人文学専攻　3名
社会文化学専攻　1名

大学院修士及び博士前期

英語英文学専攻　2名
社会文化学専攻　1名
人間科学専攻　7名

学部

英語英文学科　89名
日本語日本文学科　52名
史学科　63名
人間関係学科　67名
国際交流学科　67名
哲学科　45名
教育学科
〈教育学専攻〉　32名
〈初等教育学専攻〉　47名
心理学科　71名

※現学科名で表記

平成29年度 聖心女子大学マグダレナ・ソフィア・バラ記念学長賞

授与式　平成30年３月10日（土）

建学の精神は、一人ひとりの学生の生活の中で生きられてこそ、目的を達成するものです。

本学では、建学の精神をよく体現し、模範となる学生生活を送ったと認められる卒業見込みの学部生に対して褒賞を行っており、平成29年度受賞者は、卒業式において表彰され、学長より賞状および副賞が授与されました。

聖心会創立者
聖マグダレナ・ソフィア・バラ
（1779～1865）

英語英文学科
衛藤 ジョセフィン

この度は、栄誉あるマグダレナ・ソフィア・バラ記念学長賞を拝受しまして大変光栄に存じます。これまでお世話になったすべての方々に心より感謝申し上げます。この４年間、ゼミ、留学、ESS と多岐に渡って活動し、視野を広げ、大変充実した日々を過ごさせていただきました。所属した翻訳ゼミでは、仲間と一緒にオリジナルの翻訳本を作り上げるうえで、最適な訳語の選択や本全体の統一化の難しさを痛感すると同時に、大きなやりがいを感じました。

留学先では、世界各地の留学生との勉強を通じて、同じ文学作品に対する受け取り方の違いや活発な意見交換を楽しむことができました。E.S.S. では、「８分という限られた時間で自身のメッセージを伝える」というスピーチ活動に魅せられ、意欲的に取り組みました。

この賞の受賞者としてふさわしい存在であり続けられるよう、周りの方々への感謝を忘れずに、日々精進して参ります。

日本語日本文学科
一瀬 奈央

この度は、マグダレナ・ソフィア・バラ記念学長賞を拝受しまして、大変光栄で身の引き締まる思いです。いつも支えてくださる多くの皆様に心から感謝申し上げます。

全力で駆け抜けた４年間、様々な貴重な経験をさせていただきました。どの経験も周りにいてくださる温かい方々の支えが無ければ成り立ちませんでした。

聖心祭実行委員会では、同じ志を持ち、切磋琢磨し合える本当に素晴らしい仲間に出会えました。日本語日本文学科では、どのような時も時間を惜しまずに、親身になってご指導をしてくださる心の温かい先生方に出会えました。

聖心で出会えた方々への感謝と尊敬の気持ちを決して忘れず、聖心スピリットを灯し続けます。そして、今までお世話になった方々と、これから出会う全ての「人」の心へ、聖心で学んだ温かさが届くよう精進します。

国際交流学科
増田 京美

この度は、マグダレナ・ソフィア・バラ記念学長賞を賜りまして、大変光栄に存じます。大学生活を振り返りますと、多くの出会いに恵まれ、勉学・課外活動共に充実した４年間であったと感じます。所属する国際経済ゼミでは、仲間と切磋琢磨しながら、論理的に物事を考える力を身につけました。課外活動団体 SHRET では、難民問題に対して学生の立場からできることは何かを考え、実行に勤しむ日々を送りました。また箏曲部では、仲間と１つのものを作り上げる喜びを知りました。挑戦に満ちた学生生活を様々な面で支えてくださった皆様に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

尊敬する先輩である緒方貞子さんのように、他者に寄り添いながら、リアリストとして確実に情勢を読み解く賢明な女性を目標に、精進いたします。

平成29年度 聖心女子大学学長賞

表彰式　平成30年４月３日(火)

聖心女子大学学長賞は、学術研究活動、課外活動、社会活動等で特に顕著な成果を挙げた学生または学生団体を褒賞するものです。平成29年度の表彰式は、４月３日にマリアンホールにて挙行されました。受賞者の声をご紹介します。

英語英文学科
多賀 千尋

この度は、学長賞にご選出いただきありがとうございました。

子供の頃からの目標であった全国学生岩岳スキー大会にて３位に入賞できました事が、学長賞という素晴らしい結果に繋がり大変嬉しく思います。

私は中・高・大学を通じ、ずっと「文武両道」を目指して参りました。千葉という雪の無い県出身で週末しか滑ることができない私は、時には学校からそのままスキー場へ、そしてスキー場ではリフト上でテスト勉強をするなど、限られた時間を工夫して使いつつここまで参りました。そうした積み重ねによる結果を評価していただけた事は私にとって大きな喜びです。毎週末スキー場まで送迎をしてくれた両親、支えてくださったコーチ、メーカーの方々、応援してくださった皆様に感謝申し上げます。これからもこの気持ちを持ち続け精進して参ります。

この度は、学長賞にご選出いただき、ありがとうございます。

私は、フランスのヴィシーという場所で開催された、IRONMAN というトライアスロンの国際大会に出場し、24歳以下の部で２位という成績を収めたことを評価していただきました。この大会は、一般的なトライアスロンの距離の４倍以上もあるロングレースで、過酷ではありましたが、その分精神的にも身体的にも強くなれたと実感しています。さらに、この結果により、10月に開催される世界選手権の出場権を獲得することができました。

世界と戦うにはまだまだ力が足りませんが、今こうやってトライアスロンに取り組めていることに感謝し、また、この受賞を励みにしながら、より一層精進していきたいです。

日本語日本文学科
松藤 あかり

国際交流学科
佐々木 初奈子

この度は、学長賞にご選出いただきありがとうございます。E.S.S. の英語スピーチ大会や、外務省主催のプレゼンテーション・コンテストへの取り組み等を評価してくださり大変光栄に感じております。

英語スピーチでは、ジェンダー問題や ESD（Education for Sustainable Development）についてスピーチを行いました。今年度は SHRET での活動に関連し、難民について挑戦しようと思います。また、外務省のコンテストでは、海外で活躍する日本人の若者を増やすための取り組みをテーマに、小学生から大学生まで、日本に居ながら海外との関わりをもつための教育改革アプローチを提案しました。

この賞をいただくに際し、ご指導くださったシスターや先生をはじめ、支えてくださった多くの方に感謝申し上げます。皆様のお力添えにより受賞することができました。これからも、この賞を励みに努力して参ります。本当にありがとうございました。

宮代会だより

４月３日、穏やかな良い天気に恵まれ、無事入学式を迎えられた新入生の皆さま、聖心女子大学同窓会、宮代会から心よりお祝い申し上げます。

南門を上がった左手にある白い建物、宮代会館で私ども同窓会は活動しており、宮代会の各種行事、ボランティア活動、お稽古、会合等で多くの会員にご利用いただいております。

お稽古は華道、書道、日本画、テーブルセッティングなど、在校生も参加できますのでどうぞ宮代会館にお問い合わせくださいませ。

【宮代ショップ】

大学管理棟一階にある宮代ショップでは文房具、履歴書、ファイル等の校名入りグッズを始め日用品も揃えております。

◇宮代ショップ営業時間◇
月～金　10時～16時20分
13時30分～14時30分はお昼休憩、
但しご連絡いただければ対応可。

平成29年度第２回 聖心女子大学協力会役員会開催

平成30年３月22日午後３時から本学ブルーパーラーで平成29年度第２回聖心女子大学協力会役員会が開催されました。

濱口会長の進行のもとに、議題１「平成29年度事業報告及び決算見込について」及び議題２「平成30年度事業計画及び予算案について」、配布資料をもとに年真経理部長から説明があり、それぞれの議案が承認されました。議題３「平成30年度役員候補者について」は、名誉会長である岡崎学長に人選を一任することが承認され、議題４「平成30年度監事候補者について」は、現任の宇野節生氏、羽渕信宏氏を監事候補者として総会に推薦することが承認されました。引き続き、報告事項として北村評価・大学院担当副学長、川津学生担当副学長及び西村事務局長から大学の近況が報告された後、質疑応答があり、午後４時に閉会しました。

総務課

聖心女子大学と日本赤十字社が、共同宣言「ボランティア・パートナーシップ・アグリーメント」に調印

聖心女子大学と日本赤十字社は、2018年３月14日㈬、共同宣言「ボランティア・パートナーシップ・アグリーメント」に調印し、同日に締結式を行いました。

今回の共同宣言により、世界各地で続く紛争や飢餓、国内外で起こる多くの災害などの様々な人道的な課題の解決にはボランティアの力が不可欠であるとの認識を共有し、「人道機関」と「教育機関」というそれぞれの特徴を活かして、広く人々にボランティアとして課題解決に取り組むよう呼びかけていきます。

2018年度後期には、人道的価値観、ボランティア精神に基づく世界市民としての視点について実践的に学ぶ連携講座「グローバル共生研究Ⅱ－日本赤十字社 赤十字によるグローバルな人道支援の状況」が聖心女子大学で開講されます。

4号館だより

BE＊hive 特別企画展　豊田直巳写真展
「叫びと囁き　フクシマ・避難民の７年間の記録と記憶」

開催日：2018年２月20日(火)～４月11日(水)

（3月19日開催のトークライブの模様）

１階のBE＊hiveにおいて、豊田直巳写真展が開催されました。福島第一原発事故発生から７年、３月19日に開催されたトークライブで、豊田氏は、「放射性物質という目に見えない脅威にさらされながらも不安であると口にすることすらはばかられるフクシマの人たちに寄り添い、その現実を伝えていきたい」と語りました。本写真展は多くのメディアにも注目され、台湾（高雄）、横浜、東京での巡回展示を行っています。

安田菜津紀さんトークイベント
君とまた、あの場所へ －シリア難民の子どもたち－

開催日：2018年４月21日(土)

４月21日ブリット記念ホールにおいて国境なき子どもたち（KnK）主催、グローバル共生研究所共催、本学課外活動団体SHRET協力により、約120名の来場者を迎えて開催されました。

最初にフォトジャーナリストの安田菜津紀氏から、シリアでの難民の子どもたちの写真などにより現地の過去から現在までの様子をお話しいただきました。その後、安田氏に加え、KnKのヨルダン駐在で一時帰国中の松永晴子氏、SHRETの学生とともにクロストーク行われ、私たちができるシリアの難民支援について考えることができました。

開催予告
聖心女子大学 災害復興支援 チャリティデー

日時：６月16日（土）
12：30～16：00
場所：聖心女子大学
マリアンホール

聖心女子大学では、長期的な震災復興支援を掲げ、チャリティデーを開催してきました。本年度で７回目を迎えます。多数のご来場をお待ちしております。

卒業生の活躍

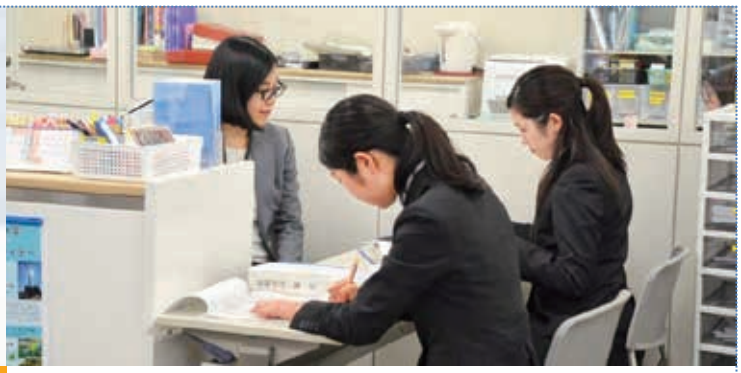
佐々木さんと増田さんの発表の様子は、メリダでも報道されました。

日本聖心同窓会（JASH）は、世界に広がる39ヶ国の聖心姉妹校の同窓会と共に世界聖心同窓会（AMASC）として結ばれており、４年に１度開かれるAMASC世界大会では、世界中の同窓生が集まり、聖心スピリットの輪を広げています。

第16回AMASC世界大会（2018年２月22日～26日、メキシコ・メリダ）では、本学卒業生（平成29年度卒業）の佐々木日奈子さん、増田京美さんによる発表「Our 16 years of life in Sacred Heart」が行われ、多くの参加者の共感と支持を得ました。

詳しくは、JASHのホームページをご覧ください。

平成29年度卒業生の進路状況及び平成30年度卒業（修了）予定学生の就職活動について



平成29年度卒業生の進路状況

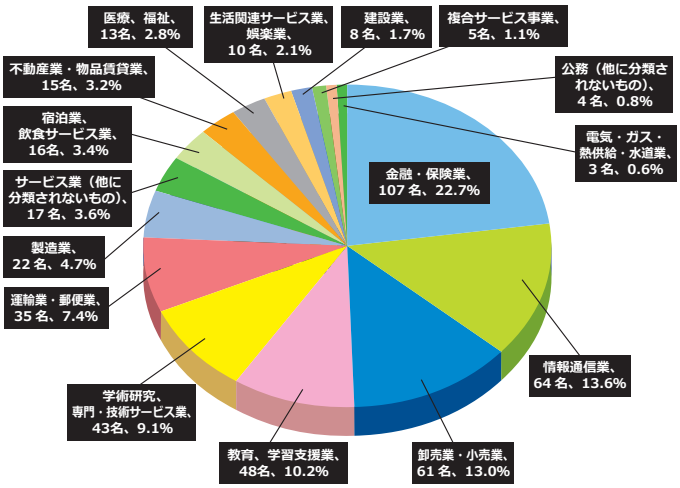
◆就職　（平成30年5月1日現在）

就職決定率	98.7%
就職決定者数	471名

◆進学

進学決定者数	30名
（うち、大学院進学者数	22名）

◆産業別就職状況



文部科学省および厚生労働省の合同調査（３月16日発表・２月１日現在）によると平成30年３月に卒業見込みの全国の学生（学部）の就職内定率は91.2%（私立大学女子92.8%）となっています。昨年同期比0.6ポイントの増加で、調査開始以降同時期で過去最高となりました。一方、本学の就職内定率は98.7%（５月１日現在）と高水準を維持しており、また、決定した進路への学生満足度（卒業時アンケート）も94.7%と良好な数値を示しています。「しなやかさ」「実行力」「粘り強さ」「礼儀正しさ」という聖心生の特性が企業等から評価されているもので、これまでの卒業生が実力を発揮し築き上げてきた社会からの信頼の上に、その伝統を引き継ぎ発展させている現役生の努力が結果につながっています。

来年の春卒業（修了）予定の４年次生については、昨年度と同様、現在、就職活動のピークを迎えています。筆記試験や面接での感触に一喜一憂し不安を感じる時期でもありますが、いつでもキャリアセンターに立ち寄ってください。本学キャンパスは都心に立地しているので、キャリアセンターで態勢を整え落ち着いてから会社訪問、採用選考に臨むこともできます。企業等により早々に内々定を出しているところもありますが、内定時期によらず一人ひとりに相応しい進路に決まっていくので、決して焦る必要はありません。

また、３年次生も就職活動を意識し始め、漠然とした不安を感じているかもしれませんが、キャリアセンターでは、学年に応じたガイダンスやセミナー等を準備しており、個別の相談、問い合わせにも常時対応しています。キャリア支援行事は、キャリアセンター前の掲示板、キャリアセンター Web サイト「Torch」で案内していますので、こまめにチェックし、積極的にご参加ください。

キャリアセンター

ご寄付・ご支援のお願い【グローバル教育環境整備募金】

「世界の一員としての連帯感と使命感をもって、より良い社会を築くことに貢献する賢明な女性を育成する」という使命達成に向け、４号館（新棟）の整備、新学寮の建設など大規模なキャンパス整備を実施しています。このため、2017年１月より３ヵ年にわたり、皆様方からのあたたかいご支援をお願いしております。

●寄付金ホームページＵＲＬ：
https://www.u-sacred-heart.ac.jp/about/contribution.html
※web 画面からの申込み・クレジット決済も可能です。

【募金に関するお問い合わせ先】
聖心女子大学　経理部
〒150-8938　東京都渋谷区広尾４－３－１
TEL 03-3407-5811（代）
E-mail:keiribu@u-sacred-heart.ac.jp

学部名称変更

現代教養学部
Faculty of Liberal Arts

新しい時代を、力強く生きる人へ。
聖心女子大学「現代教養学部」はじまる。

ほんの少し前までの常識が、日々新しく塗りかえられてゆく今日。
現代は人の価値観も十人十色、ますます複雑化がすすむ激動の時代です。
そんな今、より必要とされるのは、一人ひとりをかけがえのない存在として
尊重しあう人間観、そして、幅広い知識や柔軟な思考力をもって
世の中の課題を洞察し、社会に深く働きかけてゆく人間の知性といえます。

こうした「真の教養人」を育てる「リベラル・アーツ教育」を
本学は創立以来、変わることなく貫いてきました。
今という激動の時代にこそ、その理念をあらためて明確にし、
これからの時代を生きる人間教育を、より強く打ち出していくために。
聖心女子大学は、2019年度入学者より
学部名を「文学部」から「現代教養学部」に変更します。

これまでも社会の変化に応え、多様なジャンルの専門学科を、
８学科２専攻まで増設してきましたが、この「現代教養学部」という
新しい学部名のもと、教育システムをさらに充実させ、
これまでにない新カリキュラム・新プログラムをスタートさせます。
新たな知の世界を切り拓く、豊かな創造力を養い、
自らの考えを自らの言葉で発信し、行動する知性を磨いてゆく。
一生を支える、唯一無二の学びがここからはじまります。

聖心女子大学 学長　岡崎 淑子

学科名称変更

英語文化コミュニケーション学科
Department of English Language, Communication and Cultures

2019年度入学者より「英語英文学科」の名称が「英語文化コミュニケーション学科」へと変わります。グローバル化する世界の中で、コミュニケーションの形はますます多様化し、英語を手がかりとして、ごく身近なところから世界の広がりを感じることができるようになりました。新名称は、英語を通して世界の多様な文化を学び、現代社会の中で行動するために必要な実践的な英語コミュニケーション力の育成を目指すという意味をこめて選びました。本学科は、伝統的な文学、言語学の分野に加えて、メディア、ジェンダー、持続可能性など、今日的なトピックにも取り組む多彩な授業を開講し、また約７割の授業を英語でおこなっています。実践を積み重ねることで確かな英語力を身につけること、そして国際的なイベントや地域社会との連携、翻訳・創作活動等を通した体験型の学びを大切にしていることも本学科の特徴です。新しい学科名称のもと、みなさんと一緒に新しい英語の世界を開拓していきたいと思います。

Go Forth and Explore the World of English, Communication and Cultures!

英語英文学科

発行　聖心女子大学　〒150－8938　東京都渋谷区広尾4－3－1　TEL 03－3407－5811（代表）　編集　聖心女子大学　企画部　発行　年4回（3・5・7・11月）